

君が学ぶと 世界が変わる

77
ふくしま学びの
ネットワーク
事務局 局長 前川 直哉

まえかわ・なおや 兵庫県尼崎市出身。灘高に在学中、阪神大震災を経験。東京大教育学部卒、京都大大学院人間・環境学研究所単位取得退学。灘中・高の社会科教師を務めていたが、東日本大震災発生後、「教育を通じて復興を支えたい」と退職して福島市に移住した。2014（平成26）年4月、ふくしま学びのネットワークを設立し、事務局長として県内の学習支援活動に取り組んでいる。現在は、福島大教育推進機構特任准教授も務めている。44歳。

活動とPDCA

十月三日、福島市の自治会館を審査会場に「ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト」が開催されました。福島県教育委員会とふくしま学びのネットワークの主催、福島大学アドミッシヨンスターの共催で、前身の「社会活動コンテスト」から教える八回目となります。

今年度の本選には県内各地から、予選書類審査を通過した十二グループが出場しました。本選は新型コロナウイルス流行の影響でオンライン開催となり、各グループと審査会場をWeb会議システムでつないで行われました。どのグループも活動内容を魅力的に発表し、レベルの高さに審査員の先生方も皆さん驚いておられました。

今年度の最優秀賞は、白河市中で活動する学校を超えたグループ「チームしゅわしゅわ」が受賞しました。地域のカフェを貸し切り、手話で接客するカフェを高校生で運営するという活動です。「全ての人を楽しめるコミュニケーションをとれる社

高校生のエネルギーに驚き



10月に行われた「ふくしま高校生社会貢献活動コンテスト」本選。Web会議システムを利用して開催された

会を目標に、手話に気軽に触れ合える場所をつくり、ふだん手話にあまり関心のない人にも手話と接してもらおうという取り組みです。六月に行われた手話カフェには五十名が参加したそうです。

優秀賞には、白河市東地域でまちおこしを行う「白河高校Smile More ひがしプロジェクト」、今と未来をつなぐ「語り部活動」を主軸として活動する「ふたば未来学園高校

社会起業部」、そしてWebサイト「ふたばメディア」を立ち上げ、自分たちの高校の盛んな探究活動を整理・発信している「ふたば未来学園高校メディアコミュニケーションゼミ」ふたばメディアグループの三グループが選ばれました。他のグループも生徒たちの主体的・自発的な活動がそろう、柔軟なアイデアを実際に行動に移す福島の高校生のエネルギーに私自身とても驚かされました。

審査委員長の佐野孝治先生（福島大学副学長）は、各グループの発表を賞賛になった後、「PDCAサイクルをしっかりと実施している活動が多い」と高く評価しておられました。PDCAサイクルとは、Plan（計画）、Do（実行）、Check（評価）、Action（改善）の頭文字をとったもので、ただ単に活動をするのではなく、事前に計画を立て、活動を実施した後には反省点を振り返り、改善して次の活動につなげる一連の流れのことです。

確かに今年度のコンテストでは「やりっぱなし」の活動ではなく、来場者や参加者に対してアンケートを実施し、自らの活動を客観的に振り返り、反省点を洗い出したうえで、しっかりと改善を加えて次の活動につなげているものが目立ちました。

頭の中の計画だけでなく、実際に行動することで見えるものがあるんですね。毎年、進化している福島の高校生たちの社会活動。来年はどんな発表が見られるか、今からとても楽しみです。

ふくしま学びのネットワークは本県から新しい教育と学びの在り方を創造・発信する非営利団体で、学習法の指導や進路相談などを行っている。ホームページや公式ブログで活動を紹介している。

福島民報 2021年11月7日（日）

オリジナルのエコバッグを完成させた生徒



校章エコバッグ製作

ふたば未来
学園 高校生

原発事故で休校 続く5校を発信

広野町のふたば未来学園高の生徒は、東京電力福島第一原発事故で休校が続く浪江高、浪江高津島校、双葉高、双葉翔陽高、富岡高の五校について発信しようとして、校章や校名をあしらったエコバッグを製作した。一日から楯



小野さん(右)の指導を受け、エコバッグを製作する生徒

葉町の道の駅ならはなどで販売している。同校はこれまで五校の校章をかたどったピンバッジや校名を焼き印した鉛筆を製作してきた。スペシャリスト系列商業の三年生九人が新たな商品としてエコバッグの製作を企画。富岡町のおたがいさま工房代表の小野耕一さんの指導を受け、藍染めのエコバッグ作りに取り組んだ。生徒は各校の校章や双葉郡の地図が入った型紙を使って、藍染めのエコバッグに藍の色を抜く特殊なものを塗った。最後にのりを洗い流し、エコバッグに白の校章や地図、校名を浮かび上がらせた。価格は千五百円(税

込み)で、道の駅ならはのほかに富岡町のふたばいんふおなどで販売している。長谷川優貴さん(三年)は「難しいけど、いきたい」と語った。

双葉町内を歩く学生ら

双葉歩いて現状学ぶ

神田外語大生が探求学習



東京都の神田外語大生が運営する大栄村のフリティッシュヒルズは十一月二十六日から同二十八日まで、同グループの神田外語大の学生が双葉町を歩き、復興の現状や課題を話し合う探求学習を催した。

葛尾村野行地区に約100年前から伝わる伝統芸能「宝財踊り」が東京電力福島第一原発事故による中断を経て、ふたば未来学園の高校生らの手でよみがえることになった。中心となったのは地区出身で、現在はいわき市に住む同高3年の半沢詩菜さん(18)。「古里の伝統を取り戻し、双葉郡を元気にしたい」と、所属する演劇部員らに呼び掛け、踊り手を確保した。葛尾の大人たちもサポートする「復活上演」は2月20日を予定している。

「ホーホー、ソーレー」。復活上演まで2カ月となった昨年12月20日、部員らは踊りの練習に励んでいた。宝財踊りは、住民が「棒振り」や「博徒」などの役に扮して舞い、地区の繁栄を祝う行事だ。部員らは、役に応じた道具を持ち、右足を上げては3歩進む独特の踊りを繰り返した。

野行地区では毎年10月の第4日曜日、住民らが集会所に集って踊りを楽しんだ。踊りは、集落の人々の絆を結び付ける役割を担っていた。しかし、原発事故による避難で住民は散り散りに。地区そのものも帰還困難区域になったため、踊りは後継者の不在による消滅の危機に立たされていた。

そのような中、詩菜さんは高校の教育プログラムの

野行の宝財踊り

高校生「取り戻す」

原発事故で消滅危機



「野行の宝財踊り」の復活に向け練習に励む詩菜さん(右)ら。ふたば未来学園高演劇部員たち=昨年12月20日、広野町

一環で故郷について学んでいくうちに「古里を活性化させたい」と宝財踊りの復活を志し、仲間を募った。郡山市に避難する保存会長

の半沢詩菜さん(68)も協力した。昨年10月、演劇部員らと会った宮「雄さんは「若い感性で宝財踊りを生み出したい」と呼び掛け、仲間を募った。詩菜さんは「若いうちから踊りを復活させたい」と、部員たちが江戸時代から現代に至る村民

葛尾村民ら助言、来月上演

支援の輪も広がった。踊りの復活の場は、村の再興に取り組んでいる一般社団法人葛尾創造舎が整えた。「若い人が踊りを復活させたい」と、部員たちが江戸時代から現代に至る村民

の暮らしや文化を村内各地で演じ、最後に宝財踊りを披露する劇仕立てにした。劇の名前は踊りの掛け声に合わせ、「宝宝宝」とした。演出はタイ・パンコクを拠点に活動する演出家篠田千明さんが担当することが決まり、2月20日の本番に向け着実に準備が進められている。

野行地区は震災から11年を迎える今春、特定復興再生拠点区域で避難指示が解除され、ようやく復興のスタートラインに立つ。同法人の下枝浩徳代表理事(36)は「葛尾の記憶を後世につないでいきたい」と力を込める。詩菜さんは「楽しんで踊りたい。多くの人に見てほしい」と期待に目を輝かせる。(渡辺晃平)

福島民友 2022年1月6日(木)

ふたば未来学園高 日本語、英語で金賞

全国グローバル探究発表会

全国の高校生が地域課題解決の取り組みを紹介する「全国高校グローバル探究オンライン発表会」が開かれ、広野町のふたば未来学園高のグループが日本語発表、英語発表の両部門で金賞に輝いた。

全国の文部科学省指定グローバル型地域協働推進校などから三十校が参加し、日本語発表、英語発表各部門で



日本語発表部門で金賞に輝いた木田さん（右）と宮迫さん

各校の代表が成果を発表した。一般社団法人 Global Academy of the 21st Century の岡本尚也代表理事らが、事前に各

校から提出された動画を審査し、部門ごとに金賞などを決めた。日本語発表部門では三年の木田晏奈さん



英語発表部門で金賞の（左から）菅波さん、渡辺さん、山内さん、森さん

（も）と宮迫柚果さん（ひ）のグループが金賞に入った。鉄不足によって生じる鉄欠乏性貧血

から「鉄たまごの可能性」に迫り、緻密な実験や具体的な提案を行ったことが評価された。

英語発表部門では三年の渡辺快さん（ひ）と菅波竜人さん（も）、森俊輔さん（も）、山内直さん（ひ）のグループが金賞・探究成果発表委員会特別賞を獲得した。若者に人気のゲーム「マイクラフト」を使い、将来の双葉郡の構想を3D空間上に表現した手法が面白いと評価された。

同校は昨年の日本語発表部門の金賞・文部科学省初中等教育局長賞の受賞に続き二年連続の金賞受賞。両部門で金賞を獲得したのは同校と山形東高の二校のみだった。

復興の課題 若者と共有



副読本の完成を報告する（右から）渡辺さん、佐川さん、吉田さん、斎藤さん

広野の高校生ら副読本

広野町のNPO法人ハッピに参加した高校生らが、原
ピロードネットの本年度 発から出る放射性廃棄物の
の復興を担う人材育成事業 処分の行方など本県復興の

核のごみ、廃炉問題の学び伝える

課題を題材にした副読本だ。「Shirumanabu 副読本では、最終処分場（知る学ぶ）」を作成した。の選定を巡り調査反対派の生徒たちは10日、同町で完住民との向き合い方をテーマに寿都町の片岡春雄町長の仲間と学びの成果を共有と対談した内容を掲載。高生生の目線でも東京電力福島第1、第2原発の現状や冊を発行し、英訳版も約2冊を作成した。今後、県内の高校や海外の教育機関に配布し、授業などで活用される予定。

人材育成事業は昨年7月から11月にかけて行われ、主に浜通りの高校生11人と指導役を務めた本県ゆかりの大学生4人が参加。原発から出る高レベル放射性廃棄物（核のごみ）の最終処分場選定で第1段階の調査を受け入れた北海道寿都町や、国策の核燃料サイクル政策を担う日本原燃（青森県六ヶ所村）などを訪問し、本県復興と深く関わるエネルギー政策について学んだ。

副読本では、最終処分場の選定を巡り調査反対派の生徒たちは10日、同町で完住民との向き合い方をテーマに寿都町の片岡春雄町長の仲間と学びの成果を共有と対談した内容を掲載。高生生の目線でも東京電力福島第1、第2原発の現状や冊を発行し、英訳版も約2冊を作成した。今後、県内の高校や海外の教育機関に配布し、授業などで活用される予定。

完成報告会には、広野町のふたば未来学園高の渡辺空さん（18）、佐川生華さん（17）、吉田百華さん（17）、斎藤康洋さん（17）が参加。佐川さんは「現地を訪ねなければ分からない経験を副読本を通して伝えたい」、斎藤さんは「復興について正しい知識を知ってもらいたい」と話した。

副読本は、同NPOが2017（平成29）年度から5カ年計画で始めた人材育成事業の各年度の参加生徒と共に毎年発行しており、今回発行の第5号が最終号となる。

福島民友 2022年2月11日（金）

高校生が広野に光



町内に設置したイルミネーションを囲みながら談笑する
(左から)鈴木さん、西間木さん、貝沼さん、中島さん

「どうしたら取り組みを知ってもらえるかな」「回覧板にアンケート入れてみたらどうだろう」。2月下旬の休日、広野町のふたば未来学園高を訪れると、熱い議論を交わす生徒たちの姿があった。議論の中心にいるのは、生徒会長の中島一葉さん(17)だ。東日本大震災から間もなく11年となるが、まだ町内の街灯は少ない。中島さんは「町と住民の心を明るくしたい」と考え、通学路にイルミネーションを設置するプロジェクトを考えた。その思いに賛同した

2年の鈴木真さん(17)、貝沼秀基さん(17)、西間木健太さん(17)とともに、1月末から実際に点灯を始めた。

4人は取材した時、2月末まで点灯期間をさらに延長し、より良いものにしてと意見を交わしていた。ホワイトボードに課題を次々と書き出す。「イルミネーションのそばに看板も設置したいよね。ふたば未来の生徒がやって分かるように」「せっかくだったら新入生にも見てほしいよね」。2時間経っても、アイデア

ふたば未来生 熱い議論

ゼミから広がる課題解決

が尽きることはなかった。ふたば未来学園高には、原子力防災や再生可能エネルギーなど興味があるテーマを選び、自分たちで地域課題の解決を考える「探究ゼミ」の時間がある。生徒たちはゼミで学んだことを生かし、イルミネーションに太陽光発電を活用するなど、環境に配慮した取り組みにこだわった。「再エネで広野町に彩りを」がテーマになっている。

話し合いが一段落すると、イルミネーションの設置場所まで案内してくれた。ハートの形や円すいの置物に電飾を巻き付けて作ったという。「これ全部です」と、イルミネーションを指さし、興奮気味に話す。

生徒たちの情熱を感じるとともに、ふと考えた。自分の高校生活を振り返ると、これまで地域のことを考えて行動したことは、ついぞなかった。生徒たちに理由を聞いてみた。中島さんは「せっかくだと入学したのですから。地域を巻き込んで何か成し遂げたいんです」と目を輝かせて答えた。「自分もすっかりしなければ」と刺激を受けた。

帰りの道、浜通りを南北につなぐ国道6号を車で走りながら、復興途上の街並みを眺めた。「変革者たれ」という教育方針で学んだ生徒たちが、大人たちに続き前例のない分野が多い本県の復興を築いていくと確信した。

(相双支社・斎藤駿)

双葉の6号国道に花植栽

ハッピーロードネット 高校生らが協力



花壇は双葉厚生病院入り口交差点にあり、原発事故発生前は双葉高生が花壇を植えていた。町民を元気づけた。同法人が二〇一七(平成二十九)年に植栽を再開した。

植栽には両校の生徒と前田建設工業の社員ら合わせて約六十人が参加した。相馬農高の生徒が今年七月から育ててきたヒオラの苗約四千株を植えた。生徒は、六号国道を通る人に喜んでもらおうと、笑顔のマークができるように苗を配置し、丁寧に土を掛けていた。

花壇は双葉厚生病院入り口交差点にあり、原発事故発生前は双葉高生が花壇を植えていた。町民を元気づけた。同法人が二〇一七(平成二十九)年に植栽を再開した。

植栽には両校の生徒と前田建設工業の社員ら合わせて約六十人が参加した。相馬農高の生徒が今年七月から育ててきたヒオラの苗約四千株を植えた。生徒は、六号国道を通る人に喜んでもらおうと、笑顔のマークができるように苗を配置し、丁寧に土を掛けていた。

福島民報 2021年 10月 21日 (木)

ふたば未来高と北海道、高知の高校 コラボで特産品紹介

道の駅ならはで販売会



各高校と道の駅ならはでオンラインで結び、生徒が画面越しに商品を紹介しながら特産品を販売した。

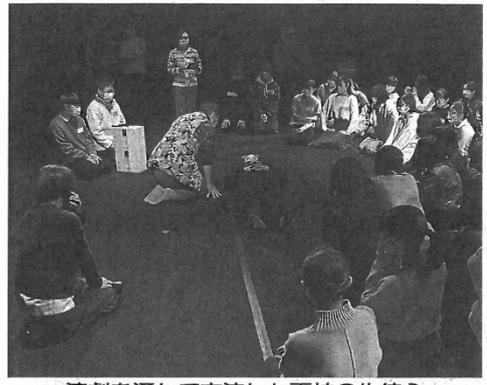
販売会はコロナ禍の中で、各高校が連携してそれぞれの地域を盛り上げようと企画した。

ふたば未来学園高と、北海道の浦河高、斜里高、高知県の佐川高の計四校が参加した。

ふたば未来学園高の来店者は、売り場に設置された画面を通してお薦めの特産品を聞きながら、次々に商品を買って求めた。

来店者は、売り場に設置された画面を通してお薦めの特産品を聞きながら、次々に商品を買って求めた。

福島民報 2021年 月 日 ()



埼玉の高校生と演劇

ふたば未来 学園 高校生

埼玉県加須市の不動岡高のスタディーツア「ふくしま学宿」は二十六、二十七の両日、双葉郡内で開かれ、広野町のふたば未来学園高演劇部の生徒らとの交流を楽しんだ。

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故の被災地の現状に理解を深めようと毎年実施している。一、二年生二十七人が参加した。生徒は二十六日、双葉町の東日本大震災・原子力災害伝承館などを回った。二十七日には、ふたば未来学園高を訪れ、研修の成果を表現していた。

研修には、いわき市で地域包括ケアに取り組み「igoku(いごく)」が協力した。

若松のNPOにパソコンを寄贈 県信用組合協会

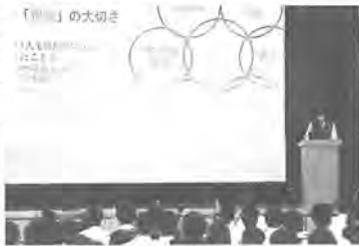
県信用組合協会(江尻次郎会長)は二十二日、障書見の「放課後等デイサービス事業」を行っている会津若松市のNPO法人ハッピーロードに、パソコン

福島民報 2021年 12月 30日 (木)

広野

地域課題を研究 ふたば未来成果発表会

「研究」の大切さ



未来創造探究の学びの
成果を紹介した発表会

広野町のふたば未来
学園中・高の「未来創
造探究」生徒研究発表
会は二十五日、同校
で開かれ、生徒が地域
の課題解決に取り組
んできた成果を発表し
た。

同校は独自の授業と
して「未来創造探究」
を実施し、原子力防災
探究やメディア・コミ
ュニケーション探究な
ど六つのゼミに分かれ
て活動している。高校
三年生が個人やグルー
プで一年余り研究を進
めてきた成果発表の場
として開いた。

分科会に続いて全体
会を開き、全校生徒と
教職員が出席した。大
学教授や復興支援団体
の代表者を審査員に迎
え、選考を勝ち抜いた
八つのプロジェクトの
発表を行った。

生徒は大熊町のイチ
ゴを使ったパン作りや
広野町特産のバナナの
包装を削減する取り組
みなど、実践を通して
得られた成果を紹介。
審査員からの質問に堂
々と答えていた。

福島民報 2021年9月28日(火)

い 確 実

で 1 週 間

門馬氏、立民系市議らが桜井氏をそれぞれ支持する。

原発事故に伴う住民避難を考慮して前回に続き、告示から投票前日までの選挙期間を10日間に延長して行われる。

昨年12月1日現在の南相馬市の有権者数は5万1392人(男性2万5702人、女性2万5690人)。

風評被害防止へアイデア

県内高校生ワークショップ



処理水に対する疑問や風評被害を防ぐアイデアなどを話し合う生徒

福島、安積、ふたば未来学園の3高校の生徒と教職員は5日、東京電力福島第

1原発を訪れ、廃炉作業の現場などを見学した。見学後に「国際高校生放射線防

護ワークショップを開き、廃炉や処理水に関する疑問を整理して風評被害を防ぐアイデアなどを話し合った。

一行は東京電力廃炉資料館を見学し、資源エネルギー庁で廃炉や処理水対策を担う木野正登参事官の講話を聞いた。その後、第1原発構内の高台から、廃炉作業が進む1、4号機を眺めた。

ワークショップには生徒や木野氏ら約30人が参加。各グループに分かれて意見を交わした。生徒は「全ての処理水の放出にかかる期間」について木野氏に質問したり「義務教育に放射線学習を取り入れる」など風評対策を発表したりした。

安積高2年の高津未彩さん(17)は「初めて第1原発を見学した。事故当時のイメージのままだったが、現状を知ることができて良かった」と話した。生徒らは今後、23日に福島市で今回

の成果をまとめる。5月にはオンラインで、フランス

の高校生らへ廃炉作業の現状などを発表する。

今年の飛躍誓う

いわきで新春交歓会

いわき市といわき商工会議所の実行委員会は5日、同市で新春市民交歓会を開き、今年の飛躍を誓った。

2年ぶりの開催で約350人が出席。内田広之市長が「市民と課題を共有しながら市勢発展に尽くす」、小野栄重会頭が「行政と連



新春市民交歓会で話聞きを行う内田市長(右から2人目)

携しながら地域一体となつてコロナを乗り越える」とそれぞれあいさつした。

森雅子参院議員、内堀雅雄知事が祝辞を述べ、サツカイJ3に参入するいわきFCの八百智社長と村主博正新監督が今季の応援を呼び掛けた。内田市長や小野会頭、遠藤智広野町長、大宰堂之市議会議長らが鏡開きを行った。

新型コロナウイルス感染防止対策のため、参加は1事業所2人とし、事前申し込みに限った。

働きやすい職場へ

県労働福祉協、連合福島

県労働福祉協議会と連合福島は5日、福島市で新春交歓会を開き、労働者が働きやすい職場づくりに向けた決意を新たにした。

県労働協・連合福島の今野幸夫会長が主催者あいさつ

但馬日記

第33回 「普通の町」幻想を 超えて

— 福島 の 矛盾、豊岡 の 苦悩 —

平田オリザ

ひらた、おりざ 劇作家・演出家
劇団「豊田」主宰
一九六二年、東京生まれ

世界 SEKAI / 2022.2

連載

「年内には一度降って、それが溶けて、一月から本格的な冬が来る」と毎年のように聞かされ、やはり今年この原稿を書いているのは二月中旬も同じようになった。二月十七日は朝から雷まじりのみぞれと強風で、夕刻か

らはそれが本降りとなる。町中でも一晩で五センチほどの雪が積もった。屋根から雪の落ちる音で明け方には目が覚める。予報では一週間後にまた雪が降るようで、ホワイトクリスマスになるかもしれない。息子はサンタさんが我が家を見つけれられるかどうか、少し心配している。

■ 福島県立ふたば未来学園を再訪

久しぶりに福島を訪れた。県内の大

に寸劇を創り、クラス代表、学年代表を選んで、さらにそれを英語劇にして国連で福島のいまを伝えるような試みもしてきた。

当初は私が直接授業を受け持っていたが、いまは私の後輩たちがその指導に当たっている。もちろん「復興パンザイ」福島は頑張っている」といった作品を創るわけではない。福島が抱える苦悩、矛盾を率直にあらわす作品が並ぶ。

■ 演劇で災禍の記憶を繋ぐ

開学してからの一、二年は震災の記憶が生々しく、それを演劇にすること、フィクションとして表現することに抵抗を示す生徒もいた。それでも福島を見つめ、それを伝えることの意味とともに考える日々だった。

ここ数年の課題は、震災の体験や記憶がまたら状になってきたことだ。避難生活がまだまだ深い心の傷となつて残っている生徒もいれば、あまり記憶

にない、あるいは実際に避難期間が短かった生徒もいる。さらに各地にバラバラになっていたトップアスリートコースが三年前の新校舎の完成とともに集約され、福島とは縁もゆかりもない生徒たちが一定数入学するようになった。

ふたば未来学園は双葉郡にあった五つの高校（そのほとんどが風向きの関係で放射線量の高い地域にあり休校を余儀なくされた）を統合する形でできた新設校だ。そのかつての五校の中には、バドミントンの桃田選手の母校富岡高校もあり、いまも伝統を受け継ぐ形で全国から日本代表クラスの生徒たちが集まっている。

そして、いよいよ震災の記憶がほとんどない世代が入学してくる。大人の一〇年と、一五歳にとつての一〇年は大きく異なる。震災の記憶のないあるいは薄い高校生たちにとって、原発事故とその後の廃炉処理は文字通りの

きな期待と、見せかけの復興のシンボルにされるのではないかという疑心暗鬼の中でスタートした県立ふたば未来学園も、開学から七年目を迎えた。

関西に居を移したことは自分の仕事上のことだから仕方ないのだが、一つだけ後悔があるとすれば東北から距離が遠くなってしまった点だ。震災後、多い年はほぼ毎月福島に通っていたのだが、いまはそれも難しい。今回も、大学の仕事が終わってから午後六時に但馬空港を出る便で東京に入り、さらに翌日早朝に列車で福島へと向かった。一日中、高校生たちの演劇発表を見て、今度は五時台の列車で（電線が全通となり一部の駅が広野町に停車するようになった）東京に戻る。翌朝の飛行機でまた但馬に帰って、その足で大学に出勤した。要するに二泊三日の行程だ。

ふたば未来学園では、高校一年生が全員、インタビュアーを元に地域課題を演劇にする授業を行っている。班ごと

不条理であり、しかし彼らは否が応でも、そこと向き合っていかなければならない。指導する教員は、また新たな苦勞を抱える。

■ 「処理水」がもたらす苦悩

さらに、政府の目論見通りなら、今年入学してきた新入生が三年になったときに、ALPS処理水の海洋放出が始まる。福島は再度、苦渋の選択を迫られている。

今年の演劇発表でも、この処理水放出問題を扱った班がいくつかあった。例えばある班は東電の实在の広報担当の方の話を軸に展開する。その女性は震災の時に高校三年生で東電への就職が決まっていた。被災者が加害者になる（本人の言葉）と迷った末に、やはりそのまま就職をして現在は福島復興本社に勤務し、海洋放出について地元理解を求めるための仕事を進めている。

もちろん高校生たちは、処理水の海洋放出問題について、賛成、反対双方

の主張を取材して劇を創る。その矛盾、その不条理を、どこまで解像度を上げて演劇にできるかが問われる。

■「普通の町」が目標でいいのか

思いのほか、福島についての記述が長くなってしまった。二〇二二年四月の豊岡市長選の題末の続きを書こう。

市長選挙の最中、候補者の公開討論会において、司会者からの「豊岡をどんな町にしたいですか？」という問いかけに、園賀現市長は「普通の町」と答えた。この言葉は豊岡財界の若手経営者たちをもっとも落胆させた。

しかし一方で、この言葉はもしかすると多くの人の共感を生んだかもしれない。「演劇の町」なんてなくていいや「コノトリの町」でさえなくていい。日々の生活を守ってほしい。その願いはまっとうで切実なものだろう。

ただ、いまの日本で「普通の町」を目標することは、そのまま衰退を意味してしまう。

この点は、実はきわめて本質的な問題だ。

安倍政権が提唱した地方創生政策の根幹は地域間の競争だった。地方自治体に人口減少対策のアイデアを出させ、それを競わせることで補助金の配分を決める。全国一律の救済ではなく、努力した自治体だけが生き残り、まさに「自助」を中心としたシステムだ。

豊岡市はその地方創生政策の優等生として、コノトリの再生に象徴される環境政策、演劇を中心とした文化政策、城崎温泉を中心とした観光政策、さらにジエンターギャップの解消などを旗印に多くの予算を獲得してきた。

当然、この地方創生政策自体に批判はあるだろう。地方自治体を競わせたところで結局はゼロサムゲーム、あるいは若者世代の取り合いになるだけで、国家全体としての人口減少対策にはならないのではないかという説もある。あるいは「誰もが豊岡になれるわけ

はない」という、消極的だが現実的な見方も根強い。

だが少なくとも、各自治体が少子化対策や新しいまちづくりのアイデアを出し合うこと自体は間違っていないだろう。またさらに、それなりの補助金を付けることも、国家の政策として大きな誤りとは言えないのではないかと人間はそれほど賢くはなく、平等、一律の「補助」は意図を招くのも事実だろうから。

これまでの連載で見えてきたように、昨年四月の豊岡市長選挙の結果は、はからずも日本の地方自治政策が抱える矛盾や混沌を浮き彫りにするものとなった。本気で地方創生に取り組み、それが成功の兆しを見せ、若い世代やアーティストたちの移住が始まった途端に地域が拒否反応を見せた。

しかしその拒否反応は、市全体のものではない。一五〇〇票差という微妙な数字だけが残った。